

3. キャトルステーション衛生対策の取組

豊後大野家畜保健衛生所 1) 農林水産研究指導センター畜産研究部
 ○ (病鑑) 菅正和・寺山将平・手島久智・飯田賢・波津久香織¹⁾

【はじめに】T市に所在するキャトルステーション（子牛共同育成管理施設）の収容能力は200頭となっており、現在30戸の農家が利用している。現状では収容能力に余力があるためキャトルステーションの活用促進を図り、省力化となった時間を利用して規模の拡大を進め、産地規模の維持・拡大を目指している。当該農場は、繁殖農家から約4ヵ月齢子牛を毎月40頭前後導入し、市場出荷まで飼養している。2018年、季節を問わない呼吸器症状や下痢症多く確認され事故率も高く、その事故率低減に担当開業獣医師、共済獣医師と共に取り組んだので報告する（図1, 図2, 図3）。

衛生対策を開始した背景

- 死亡・廃用事故が多発
- 呼吸器病や下痢症が多発
- クロストリジウム感染症を疑う急死事例の散発

衛生対策チーム

2019年7月から、事故率低減を目的として

- ①開業獣医師
- ②農業共済獣医師
- ③農業協同組合
- ④家畜保健衛生所

共同による衛生対策チームを編成

図1

衛生対策の取組①

- 搬入前事前検査
搬入数日前にJA職員が農家で搬入予定牛の発育状況、健康状態の確認
- 搬入前の牛房消毒
搬入前にJA職員による牛房の消毒
- 搬入時処置・検査
チーム全体で毎月搬入時に実施
 - ①体重測定、体温、聴診
 - ②耳掃除
 - ③採血
 - ④鼻腔スワブ採取
 - ⑤ワクチン・抗菌剤・駆虫薬等の投与

健康状態の悪い牛は
 いったん農家に戻す

図2

衛生対策の取組②

- 搬入後の治療・予防
開業獣医師が異常があった際にその都度治療
定期的に必要なに応じたワクチン接種
- 全体検討会
メンバー全体による検査結果の共有、個別指導の検討
- 個別農家指導
搬入元農家における個別指導

図3

【材料及び方法】2019年7月から毎月搬入される子牛（40頭程度）の血液及び鼻腔スワブを採取し検査に供した。また全頭について、耳介の掃除を行いペニシリン懸濁液を点耳した（図4）。

【検査内容】搬入牛全頭について、一般血液検査、血清生化学検査（T-cho、TP、ALB）、細菌検査（鼻腔スワブからの細菌分離）、ウイルス学的検査（呼吸器関連ウイルス抗体検査、PCR検査）を実施した（図5）。

【指導内容】搬入時に、体重測定、聴診、体温測定、血液検査及び鼻腔スワブ検査を行い、ウェルカムショットとしてTSV2、ミコチル、クロストリジウムワクチン、駆虫を実施している。搬入時の検査で発熱、肺雑音等が確認された個体は受入れせずに繁殖農家に戻している。また鼻腔スワブ検査でRSウイルス抗原陽性となった個体は2週間隔離するよう指示した（図6）。



図4

③採血

- 一般血液検査
- 生化学検査(T-cho、TP、ALB、ビタミンA・E、βカロテン)
- ウイルス学的検査(呼吸器関連ウイルス抗体検査)
→中和抗体価: BRSV、BCV、PI-3、BHV1

④鼻腔スワブ採取

- 細菌学的検査
使用培地: 血液寒天培地, MSE寒天培地, DHL寒天培地
薬剤感受性検査 (AMX25、AM10、P10、K30、Te30、ENR)
- ウイルス学的検査
RSV抗原検査

⑤ワクチン・抗菌・駆虫剤の投与

- ワクチン
クロストリジウムワクチン
TSV3
- 抗菌・駆虫剤
サルファ剤
イベルメクチン製剤
ミコチル注
イソジンの鼻腔噴霧
- ビタミン剤



図5

図6

〔呼吸器病対策〕搬入時RS抗原検査で陽性を示す個体が複数みられた農場において、呼吸器疾病の予防対策検討のため呼吸器症状関連ウイルスの中和抗体検査を実施した。その結果、キャトルステーション搬入前にTSV3、呼吸器5種混合ワクチンの早期接種を指導した。また、繁殖農家に対しRSウイルス対策の啓発を行った（図7）。



図7

〔下痢症対策〕水様性下痢の群での発生があり、アデノウイルスの関与もあったが、一般血液検査、生化学検査、及びビタミン検査を実施した。その結果ビタミンAについて低値の個体が多くみられた。またその結果を受け、飼料添加剤の変更を行い、その適正量を把握するため牛群をおってビタミン検査を実施した（図8）。

〔クロストリジウム対策〕2021年12月、急死事例がありその原因究明のため病性鑑定を実施しクロストリジウム・ハーフィングス感染症と診断した。それを受け農場のクロストリジウム対策としてのアルデヒド製剤を用いた消毒方法について指導を行った（図9）。



図8

